

ントの渡されていたものについてはそれを種に質問の準備もできて大変面白くあった。わたくしの発表は *Structure and characters of the Cur deus homo* で、これは *Cdh* の三極構造をのべたものである。

発表の中には11, 12世紀の歴史に関するもの、教義学的なもの、信仰論的なものも多かったのであるが、これらについてわたくしが余り強い関心を抱かなかったことはアンセルムス理解の上では片手おちかもしれない。

Herrera 氏とは終始一緒になり、また Hartshorne 先生とは散会后一日残留して東西比較哲学のこと、Whitehead のことなど伺って楽しくあった。R. Southern 氏、H. Kohlenberger 氏をも知りえて有難くあった。今回は未決定であるが、10年後といわず5年後にしたいとの会頭提案が最後に出された。

(泉 治典)

第3回国際エリウゲナ会議

国際エリウゲナ会議は、1970年にダブリンではじめて開催されたが、1979年8月末、第三回の会議が、西ドイツのフライブルク大学で催された。この会議の主体となる学会は、「エリウゲナ研究振興協会」と名付けられ、今回の会議は、「ドイツ研究協同体」(DFG)の援助と、ハイデルベルク科学アカデミーの協力を得て、「エリウゲナの(依った)諸原典」という統一テーマのもとで開かれた。DFGとの関係上、人数が著しく制限され、正式参加者は約30名、それにフライブルク大学哲学科学生約10名が加わり、研究発表者12名という、こじんまりしたものであった。

学会の行事は、8月27日午後8時に、この学会の会長であり、今回の主催者であるフライブルク大学のパイアーヴァルテス教授の公開の開会講演で始まった。講演の中で、教授は、ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナを、思想史的に、アウグスティヌスとアンセルムスの間の中世初期の最も驚嘆すべきかつ説得力のある思想家と位置づけ、中世盛期とルネサンス期には、かれの思想が、教皇の禁止にもかかわらず少なからぬ影響を与えたこと、その後時を経て、19世紀に、トマス・アキナス

への対抗において再発見されたこと、特に、当時フライブルク大学教授であったシュタウデンマイヤーによって、エリウゲナが、「思弁的神学の父」と理解された意義や、更に現在までのエリウゲナ研究の概観などに触れられた。また教授は、統一テーマに関して、その解釈学的意味を強調され、諸思想の受容において、エリウゲナの思考が、神学に媒介されつつ、新プラトン主義の哲学によって本質的に規定されていることを述べられた。

続いて行われたハリファックスのアムストロング教授による「哲学、神学および解釈——解釈者の解釈」という講演は、思想家の独創性と原典への依存性、さらに解釈者の主体的な活動と解釈の対象の歴史的客観性との間の関係などの解釈学の問題を論じたものであった。

翌28日には、トロントのアラル教授によるエリウゲナの体系における言語の働きの分析や、パリのジュノー教授によるニッサのグレゴリウスとエリウゲナにおける性の区分についての発表などがあり、最後のノートルダムのガーシュ博士による「エリウゲナの哲学の原典としてのマクス・コンフェソール」は、エリウゲナ思想の中に、主観的観念論ともいえる要素を指摘するものであったが、それには多くの反論が出され、活発な議論がなされた。

翌29日には、トロントのストック教授、パリのマデック博士、ダブリンのオマーラ教授によって、次々と、エリウゲナとアウグスティヌスの関係についての発表があった。特に、この学会の事務局長であるオマーラ教授による「アウグスティヌスの〈創世記註解〉のエリウゲナによる使用」というテーマでの詳細な分析は、アウグスティヌスとの連関と対比で、エリウゲナの特徴を明らかにした、文献学的意味のあるものであった。その日にはなお、ケンブリッジのマランボン博士によって、エリウゲナと「十範疇」の関係も論じられた。

最終日30日には、フルダのシュリムプ博士によるエリウゲナにおけるマルティアヌス・カペラの影響、およびパリのドゥシェー博士とローマのドノフリオ博士によるエリウゲナのポエティウスへの関係についての発表があった。

これらの研究発表のほかの行事として、二日目の晩に、フライブルクの代表的ゴシック建築のミュンスターの見学がなされ、三日目の晩には、フライブルク大学学長主催の歓迎会が催された。最終日の午後には、フランスとの国境に近いカイザー

シュトゥールへの美術鑑賞の遠足があり、帰途フライブルクの郊外で、夕食会と賑やかな歓談が遅くまで続いた。

学会を振り返って印象に残ったことは、会議での活発な討議と、全体を通じての和やかな雰囲気である。これは、主として、主催者側の3年にわたる周到な準備——あらかじめ参加者全員に発表論文のコピーが送られたことも含めて——と、人数の制限などに由るものと思われる。だが、期待された研究者数名が病気などのため欠席したこと、「原典」が主としてアウグスティヌスに限られ、たとえばプロイド・ディオニシウス・アレオパギタなどには言及されなかったことなどは残念であった。それにもかかわらず、この学会は、主催者の言葉を借りれば、エリウゲナ研究にとって「歴史的意味」のあるものであったといえるであろう。

なお、この会議での全発表論文は、ハイデルベルク科学アカデミーより、一冊の本として出版される予定である。

(小田川方子)

第8回国際教父学会

昨年夏、英国の Oxford で開催された「第八回国際教父学会」(The Eighth International Conference on Patristic Studies)』に出席する機会をえたので、簡単に報告したい。

本学会は日本であまり知られていないが、充実した内容を備えた注目すべき行事である。『教父学概説』の著者、特に『オックスフォード・キリスト教会辞典』の編者として有名な F. L. Cross が中必となり提唱し、1951年9月に発足し、以後4年毎に開いている。クロス之死(1969)後も英国の学者が主催者となり、先の辞典の改訂者 E. A. Livingstone 女史が事務局を担当し、毎回着実な成果を挙げている。筆者が初めて参加した第六回大会の時は、J. Daniélou 枢機卿が開会講演を受持ったが、彼も故人となった。このほか学会で知りあっていたイタリアの M. F. Sciacca も死去し、この意味では世代の交代がみられる。しかしこれは学会の停滞